

Library News

図書館だより No. 48
Nara National College of Technology

2000年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



明日香野（香具山より）・本校名誉教授 石垣 昭先生スケッチ集より

巻頭言

「図書館長の任務を終えて、今想うこと」

前図書館長 中和田 武

図書館長の任期をあと1ヶ月残すばかりの1999年2月26日「ガン告知」、図書部会長だった山内先生に代理をお願いし、3月6日入院手術、7月15日に復帰しました。

この間、校長先生をはじめ教職員の皆さん、学生諸君には大変ご迷惑と心配をおかけ致しました。心からお詫び申し上げます。

館長在任中は、図書係員はもとより図書館委員の先生方、学生図書委員会に助けられ、不安ながらも二つの事業をスタートさせることができたことは私の大きな喜びであり、誇りであります。

その一つは多読表彰です。校長先生をはじめ学生会のご援助により軌道に乗りました。いまでは全国高専の貸出冊数ベスト3を誇るに至っています。

二つ目は、学校当局のご理解のもと図書館の一般開放を行ったことです。現在240名もの方々が登録されています。これだけの登録者数や利用者数は全国的にみても多い方ではないでしょうか。利用目的を見てみますと一般教養が78%、残りの22%は学術研究、技術調査となっています。企業の方々や大学生等が調査研究のために利用下さっていることは、県内における工業関係図書館としての位置づけがなされたのではないかと考えています。

一般開放をして特に印象深かったのは、以前にも述べたことがあります。利用者の一主婦が横浜に転居する際、わざわざ感謝の手紙を書いて持ってこられたことや、又別の利用者ではありますが、お菓子の差し入れをして下さったことです。図書館にきて気分転換をさせてもらっているなどという言葉聞くにつけても、地域との繋がりを更に強く願わずにはおられません。

昨今の社会情勢の中で、各企業のトップは21世紀に生き残るために必死の模索を続けています。そして企業戦士を生んだ会社ではなく人間の精神を尊ぶ会社、すなわち「心の企業」に変身することが必要であるとしています。

それ故、江戸中期の思想家であり、心学の開祖と言われる「石田梅岩」(1685~1744)がクローズ・アップされたのだと思います。「梅岩」は丹波の農家に生まれ、22才で京の商家に奉公の後、商売の社会的な役割を自覚し、さらに人間生活の意義を探究するに至り、心を得ることが人として大切なことであると感得した人物です。彼の学問は人間の尊厳性を究明するところにあります。

今、この「梅岩」の考えを基に企業は自ら変革しようとしています。このことは現代社会や学校教育にあっても等しく言えることではないでしょうか。「心の教育」こそが21世紀の原点であり、人間性の回復があってこそ未来が見えてくるのではないかと思います。

本校の図書館が一般開放で、あるいは多読表彰でヒューマン・キャピタル(人財)を育てるという時代の要請に少しでも応えることができたならこんな嬉しいことはありません。

21世紀を迎えるにあたり私達は、祖先が歩んだ歴史の中に、また祖先の書き示した書物の中に、人類がよりよく生きるための知恵やヒントが存在することを察知し、これらを発掘し、応用することのできる能力を養いたいものです。

学生諸君、21世紀は「心の時代」(人間本来の心を取り戻す時代)です。諸君のさらなる実りある学生生活・読書生活を期待します。

特別寄稿(1)

「私の本とのつき合い」

電子制御工学科 栗本 尚

私がまだ学生の頃、学校の教科書は別として、本を読むといえば、自分で本当に読みたい本を読むというよりも、学校での勉強の一環として、日本および外国の名作といわれている本を、読んだ方がよいということで読むことが多かったように思います。このような義務としての読書という形で、そんなに多くの本ではないが、少しずつは読書に親しんできました。しかし、学校を卒業し、実社会で仕事をするにつれ、次第に自分が本当に読みたい本を、自らすすんで読むようになり、この傾向は年齢がすすむにつれ加速されていきました。最近では、読書が自分の生活の一部となり、どうすれば読みたい本を少しでも多く読めるかということについていつも考えています。

ここで、最近の私はどのような本に関心をもっているのかについてふりかえてみました。私は、33年間会社（メーカー）で技術者として、その後8年間奈良高専で教官として仕事をしてきたこともあり、自分の専門分野である電気工学や制御工学の専門書は、必要に応じて読んでいます。この技術者としての仕事とも関連して、科学技術全般の現状および将来動向に関心が強く、そのような解説的な本をよく読みます。特に、会社では航空機搭載用電子機器の技術関係の仕事が比較的長かったこともあり、航空宇宙技術の動向についての本にも興味があります。また、最近のコンピュータ技術の急速な発展とも関連して、人間の脳の働きにも興味が高く、解説的な本も時々読みます。

もっと若い頃にはよく読んでいた文学小説やその他の小説はほとんど読まなくなり、最近ではむしろノンフィクションに興味が高く、ジャンルを問わず気の向くままに読んでいます。テレビや新聞で世の中の動きを知り、自分との関わりにおいて、もっと深くかつ正確に知るための本を、探して読むことも多くなりました。一方、会社に入社した頃から信州の山に登りはじめ、現在もゆっくりとした山登りを続けていることもあり、山に関する本もよく読んできました。特に、山の写真をよく撮るため、山の写真集には強い関心をもっています。また学生の頃映画をよく見たが、社会人になってからは忙しいため全く見ていたかった映画を、最近再び興味をもって見るようになったこともあり、映画に関する本もよく読みます。

以上のような本、特に仕事関係以外の本については、家で机に向かって読むというより、通勤途中の電車の中でほとんど読んでいます。電車の中は騒がしいけれども、意外と読書に専念できる空間です。

目 次

巻頭言「図書館長の任務を終えて、今想うこと」	前図書館長 中和田 武…………… 1
特別寄稿(1) 「私の本とのつき合い」	電子制御工学科 栗本 尚…………… 2
特別寄稿(2) 「10年間1000冊読破プロジェクト」	本校卒業生 百瀬 隆…………… 3
読書感想文コンクールを終えて	…………… 6
図書館大会に参加して	図書係 福井 洋子……………16
第13回ブックハンティングを実施	……………17
図書館からのお知らせ・等	……………19

そのために、大きくて厚い本は避け、小さくて軽い新書本や文庫本をよく読んでいます。また、本を読むとき、できるかぎり自分の本として購入して読み、いつでもその本がとりだせるようにしています。年をとるにつれ記憶力が減退し、せっかく読書をして、時間がたつとその内容を、ときには本のタイトルさえも忘れてしまいがちです。しかし、読んだ本を手元にとりだして、ぱらぱらと見ることにより、読んだ内容をある程度思い出すことは期待でき、必要に応じて該当部分を再度読むこともできます。最近、新書本や文庫本は発行点数も多く、いろいろなジャンルのもが含まれており、コストも安いので、非常に好都合です。特に、ノンフィクションは新書本に多く含まれています。私のよく読む新書本は、岩波新書、中公新書、ブルーバックスなどです。新書本より少し大きい、NHK ブックス、朝日選書などもよく読みます。

私は、この3月で奈良高専を定年退官し、その後は週1日程度の非常勤講師をします。自分の自由な時間が多くなるため、以前に購入してまだ読んでいない本、かねてからひまになれば読みたいと思っていた本、家でしか読めない美しい写真や図や絵の入った大判の本などを、できるかぎり多く読みたいと楽しみにしています。

特別寄稿(2)

「10年間1000冊読破プロジェクト」

ダイセル化学工業株式会社 百瀬 隆
(昭和49年 化学工学科卒業)

1. はじめに

私は昭和49年に化学工学科を卒業し、編入学を経て大学、大学院で勉強した後、技術者として働き、現在ダイセル化学工業(株)で知的財産関係の仕事をしております。卒業後25年経ち母校との関係が徐々に薄れる中、昨年11月11日に化学工学科の4学年と5学年を対象とした特別講義があり、その講師として「技術者の夢」と題して後輩の前で約1時間半お話する機会に恵まれました。その講義では技術者のキャリアプランについてお話し、人任せではなくいかに自分のキャリアを設計していくかその重要性をアピールするとともに、設計上のノウハウについていくつかの具体例をご紹介しました。今回はそのノウハウの中で、図書館を利用される方に縁が深い「読書の重要性」について、その内容をご紹介したいと思います。

特別講演会に於いては「読書の重要性」に関して私自身が取り組んでいる、10年間で1000冊の本を読むという個人的なプロジェクトについて説明しました。これは1991年の新年に決意し始めたもので、1年間100冊のペースで読み進めれば10年間でトータル1000冊となり、2000年の末に目標が達成され新たな世紀を迎えることができます。今年の1月1日現在で914冊ですから、残る1年で86冊となり目標達成はほぼ間違いはないものと考えています。

2. プロジェクトを始めた理由

何故このプロジェクトを始めたかその理由について説明したいと思います。私は高専時代から専門書以外の本も積極的に読むように心掛けてきましたが、その動機はどちらかと言えば本を楽しんで読むというより、大学生に負けたくないという意識に駆られていたようです。カリキュラムからすれば大学より一般教養の時間数は少ないことは明らかであるし、工学に特化しているので文系の学生との接触の機会もなくどうしても発想が単調となってしまう、大卒と比べ人間の幅が狭くなってしまうのではないか

という恐怖感を持っていました。その気持ちは卒業後も続き、東工大の修士在学中には工学部の指導教官の反対を押し切って、大学院の授業として単位取得可能な江藤淳先生の「比較文化論」のゼミナールを受けるという行動にでました。このゼミでは先生に最高点をつけて頂くという幸運にめぐまれ、ようやく以前から心の中にあった恐怖感を取り除くことができました。

さて、その後会社に勤めてからは割と自由な気持ちで、文学、哲学、中国の古典、ビジネス書等を読んできましたが、36才の時に今の会社に転職する際、再び高専時代に抱いていた恐怖感が蘇ってきました。それまで築きあげたイオン交換膜技術者としてのキャリアの社内的な価値の低下、技術者としての能力以外にマネージャーとしての能力向上の必要性や上司との意見対立による昇格の遅延などが複雑に絡み合い、このまま会社に居続けて良いものか、別な会社に移り新天地を切り開く方が良いのではないかという迷いが生じました。それに対する意思決定をする過程で、今までに身につけた能力はどのようなものであるのか、自分はいったい何がやりたいのか、はたしてやりたいことができるのか等について考えましたが、転職という特殊な事情で周りに相談できる人間はおらず、結局は限りある自分の経験に基づいて判断せざるを得ませんでした。この時まだまだ人間の幅が広がっていなかったことを痛感させられました。

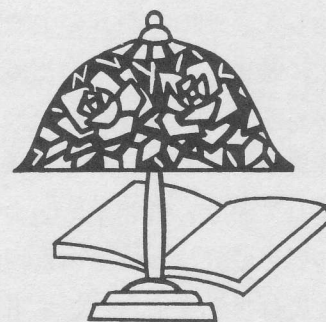
つまり個人的な重要な決定をする場合、意外と相談できる人が周りにおらず、いたとしても最終決定は自分で行うことになるという当たり前のことを自覚するとともに、自分で決断する上でのものの考え方が確立されていないことに気が付き、今まで本を読んで幅が広がったと思っていたのは自己満足ではなかったのかと思い始めたということです。この思いがドライビングフォースとなり、新たな気持ちで読書を始めようとして考えたのが「10年間1000冊読破プロジェクト」です。とにかく行動に移し、意味付けはやりながら考えるということでスタートしました。

3. プロジェクトを進める上での工夫

冒頭で述べましたように、このプロジェクトを進めるためには1年間に100冊のペースで本を読むこととなります。文筆を業としている人からみれば少なすぎると言われるかも知れませんが、会社に勤務し家に帰るのが通常夜の10時近くとなると、本を読む時間が制約されるので、工夫しないとこのペースが保てません。そこで読書の時間を確保するために心掛けたこととして、テレビをなるべく見ないこと、新幹線の移動では本を読むこと、休日はなるべく読書に当てることなどが挙げられます。既にこれらのことは日常生活の中で習慣化しておりますので特に苦痛は感じません。

読書の履歴を残すための工夫として、読書後カードに書名、著者、出版社、記入日を書き、そのカードに読書冊数の通し番号を付け、読書ボックスに保管しています。そのボックスに年毎の仕切りを入れてますので、ボックスを見るだけで毎年どれくらい本を読んでいるか一瞥で知ることができます。そしてそのボックスを机の上に置いておき、常に目に触れるようにしました。カードに対する工夫としては、コメントがあれば裏面に書くことや、面白いと感じた本については緑色の、専門書には黄色の、英語の原書には青色のマークをそれぞれ張り付けたことが挙げられます。

読書の冊数を決める上での工夫もしました。時間の制約のある中で読書ですから、冊数を稼ぐためにどうしても簡単に読める本を選んでしまい、内容があっても時間がかかる本は後回しになる恐れがあります。私の場合250ページの文庫を一冊読む時間が約4時間ですので、それを一冊としてカウントする目安にしました。例えば、英文の専門書を読む時に40時間使った場合、10冊とカウントしました。このカウ



ント方法を使うことにより、読むのに時間のかかる本も避けずに読みこなすことができました。

どのような本を読むかについては、自分の好みのものだけを選んで偏らないように、図書に関する案内書から適当に選ぶということも行いました。例えばPHP研究所が発行した「ビジネスマンのための100冊の本」や「ビジネスマンのための100冊の古典」は本を選ぶうえでよき道しるべとなりました。その後、本の選び方についてはある特定の著者のものを纏めて読むとか、あるテーマについて本屋で適当に選ぶとかその時々で変えています。

さらに本選びについては、毎週土曜日の午前中は行きつけの本屋で一通り背表紙を見て周り、興味を引かれたものについて内容を確認の上買っています。また郊外に大きな古本屋がありますので、時々どんな本があるのか見回ります。さらに神田の古本屋街を散歩がてらうろつくこともあります。このように本選びには、本屋に繁く足を運んでなるべく多くの本の背表紙をながめるように努めています。

4. プロジェクトの成果

このプロジェクトの目的は前述したように人間の幅を広げることでしたが、どのようにしたら幅が広がるのか、そもそも人間の幅を広げるとはどういうことであるのかについてもわからずにスタートしましたので、最初は難破船が大海で漂流している状態に近かったと思います。それから9年過ぎ今年末にはプロジェクトが完了しようという現在、どの程度地図が描け、自分の位置が定まり、船をどの方向に進ませるかにつきどの程度までわかってきたかについて考察したいと思います。

人間の幅と読書の関係については、谷沢永一氏の「人間にとって勉強の本筋は、あくまでも人生体験である。人間を鍛えるのは人間関係という砥石である。書物の効用は二通りしかない。その第一は人生に処する心構えを教えてくれること。しかしこれは要するに置水練であって、いざ水に入って体が浮くようになるには、おのずから別な実施の工夫が要る。効用の第二は、実社会で苦労した事柄を、どう納得したらよいか、つまり経験を整理する勘所を教えてくれること。読書は体験の代用品にはならないのである。」という言葉が示唆に富んでいると感じました。即ち人間の幅をもたらすのは「人間関係という砥石」であって、読書そのものではないということです。この指摘は、読書が体験を増やし、それによって人間の幅を広げることができるという私自身の考え方を根底から覆すことになりました。

そこで読書の効用が何であるか再考しましたが、「世の中の変化の意味付け」と「自分の経験が持つ意味付け」について、それぞれ意味付けというプロセスにおいて読書が役立つのではないかという考えに至りました。「世の中の変化の意味付け」は現状の地図を描く上で必要なプロセスであり、「自分の経験が持つ意味付け」は描いた地図において自分がどこにいるか定めるのに必要なプロセスであると考えられます。前者の意味付けは、著者の変化に対する感受性が重要となり、後者の意味付けは、同種の経験に対する著者の解析力が重要になるということで、若干性質が異なるのではないかと考えてます。

それでは、地図と自分の位置が確認された難破船をどの方向に進ませるかについて読書は有効であるのかという問いに対しては、今のところ読書がそれ程役立たないと言うしかありません。試行錯誤を繰り返して、そのあがきの中で方向性を見い出していくのが現実的な対応であると考えています。

次に読書を意味付けのための道具として活用するという観点から、プロジェクトの価値を見直しましたが、読書を続ける過程で、ものの見方、考え方が非常参考になるという数人の作家を確保できたことは成果があったと判断しています。例えば当代きっての読書人といわれる谷沢氏は人間についての洞察が優れており、人間学に関する書物の紹介の点でも非常に参考となったこと、伝記作家の小島直己氏は経済界の要人についての人物評価に優れており、人物の評価方法で参考となったこと、哲学者の鷲田小彌太氏は哲学を道具として用い日常の問題を解析していく手法に優れており、哲学を身近なものとして理解するのに役立ったことなどが挙げられます。

プロジェクトの成果を別な観点から見ますと、先程紹介した作家を教授として、自分にとって必要な仮想の修士課程をつくることができたということではないかと考えています。このコースは、世の中の変化と自分の置かれている位置を明確にし、意思決定を行っていくということで、「政策決定学専攻」と名付けています。コース終了のために1000冊の本を読むということは、約4000時間を使うこととなり、使用する時間から判断しても修士課程2年間に匹敵するものと考えています。

5. おわりに

今回は、「10年間1000冊読破プロジェクト」についてご紹介しましたが、決して本を沢山読もうと言うことをアピールしたかったのではありません。本の読み方には、娯楽としてリラックスして読むことや、コンピューターの操作方法を知るようなハウツウを取得する読み方、学問上必要な文献としての読み方、人生の意味を考える読み方などありますが、どのような読み方をされるかはそれぞれの方が考え、最も役に立つ方法で利用されれば良いものだと考えます。今回ご紹介した内容が、今後本の読み方を考えられる上でお役にたてたらと思いつつ筆をおきます。

平成11年度 読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会

第24回校内読書感想文コンクールの結果を発表します。応募総数は375編。その中から、図書館委員会と国語科教官による審査の結果、次の9名の作品が入選作となりました。今年度は最優秀賞に該当する作品はありませんでした。優秀賞に選ばれた人の氏名をここに記し、その栄誉を称えます。

優秀	機械工学科1年	梅田 昌紀	「目玉かかしの秘密」を読んで
優秀	電子制御工学科1年	上谷 巧	「五体不満足」を読んで
優秀	情報工学科1年	青山 瑠美	「友情」って
優秀	情報工学科1年	畑内 優子	「不思議な少年」を読んで
優秀	機械工学科2年	黒田 健介	「島物語」を読んで
優秀	機械工学科2年	森口 幸	「五体不満足」を読んで
優秀	電気工学科2年	玉井 芳英	「自由をわれらに」を読んで
優秀	情報工学科2年	西野 達也	「もの食う人びと」を読んで
優秀	物質化学工学科2年	木田 智佳	「豚の死なない日」を読んで

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で高い評価を得て、最終選考まで残った作品もありました。以下にその氏名を記し、健闘を賞します。

1 M	西岡 哲哉	1 E	川上 悠太	1 E	豊田 和也	1 S	江副 陸也
1 S	松村 礼央	1 I	酒田 理人	1 I	坂上 綾	1 C	谷殿 真実
1 C	田中 大資	1 C	前田 実保				
2 S	青木 広	2 I	石井 誠	2 I	中坊 典史		
3 E	柳澤 佑輝	3 I	今岡 賢太				

その他にも多数の力作があり、応募された学生の皆さんに、この場をお借りして感謝の意を表します。以下に、入選作について、審査に関わった一人として、簡単に講評を記しておきます。

1 M梅田さんの作品は、理系の本を対象としながら、自身の御祖母様がかかし作りをしている話などを織り交ぜ、人間と動物との共存について上手くまとめられています。特に高専の学生には、ぜひこのような本を読んでほしいと思います。

1 S上谷さん、今回のコンクールでは、『五体不満足』を取り上げたものが数多く、選考に当たった教官も、どの作品を選ぶか迷いました。その中で、一年生の中から選ばれたのがこの作品です。この本全体の内容をよくまとめ、自分の感想を述べています。ただ欲を言えば、感想文の中にはこの本について厳しい見方をしたものもいくつかあり、個人的にはそういった視点も踏まえた上で、このような問題を考えてほしいと思いました。

1 I青山さんの作品は、登場人物の身になって、一人の女性をめぐる二人の男性の立場、また友情についてよく考えています。このような小説は、皆さんが大人になってから、もう一度読み返してみると、また新しい発見があるはずです。

1 I畑内さんの作品。マーク・トウェーンの逆説的な小説を読んだ感想を素直にまとめています。最後の方が「問いかけ」に終わっているのが少し残念な気もしましたが、まだ一年生ということですから、これからさらにいろいろと考えることができるでしょう。

2 M黒田さんは、昨年につき二回目の入選となりました。人間は自分勝手に「生きている」のではなく「生かされている」ということを、説得力のある文章でまとめています。豊かな社会に育った皆さんにぜひ考えてほしい問題です。

2 M森口さんの作品。義手や義足を作る仕事に就きたいと思い、高専に入学したという森口さんにとって、この本との出会いは大いにプラスになったことでしょう。感想文をまとめながら感じたことを大切に、夢の実現に向けて頑張ってください。

2 E玉井さん、よい本を読んでいます。昨年に引き続き入選となりました。巧みな文章力で、よくまとまった出来になっています。後は、どれだけ自分自身に関わる問題として感じる事が出来るか、です。おそらく玉井さんの心の中には、人の痛みを感じる事のできる土台は出来上がっているはずです。

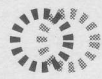
2 I西野さんの作品は、今風のとぼけた文章で、面白く読ませてもらいました。中段、もう一步踏み込んでみるとさらによくなったかもしれません。

2 C木田さんの作品、現代社会では向き合うことの少なくなった「死」というもの、また「豊かさ」について考えたものです。素直な文章ですが、文末が「～と思います」で終わっていることが多く、少し物足りないようにも思われました。これほど上手に本の内容をまとめる事が出来るのですから、さらに上を目指して下さい。

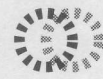
なお入選者の表彰式は、1月5日、昼休みに校長室にて執り行われました。これからもいろいろな本を読んでみて下さい。本の中では他人の人生が体験できるわけですから。

(国語科・鍵本)





入選作品紹介



城田安幸 著

「目玉かかしの秘密」を読んで

機械工学科1年 梅田昌紀

数年前あちこちの田畑、マンション、アパートの窓に現れた「目玉風船」。実際のところ「あの風船で鳥を追っ払うことが出来るのだろうか。」と疑っていた。

私の祖母は農家でもないのに毎年かなりの数のかかしを作っている。かかしといっても大変かわいい子供の姿をしたかかしだ。勤務先の会社の前にある水田にどうしてもかかしを立てたかったという理由から作り始めたらしい。農家の人のために鳥を追っ払ってあげようなどという気は毛頭ないようだ。水田以外にも花公園のような所にまで三体～五体と立てて楽しんでいる。今では近所でちょっと名の知れた「かかし作家」になっている。

以前、祖母に

「このかかしでスズメを追っ払うことはできるの。」と聞いた。祖母は

「スズメがかかしに止まっているのは見たことがある。」

といった。祖母の作るかかしたちは遠目で見ると本当に子供が二、三人寄って遊んでいるように見える程よく出来ているのだが、どうも本当の子供のように見える「かかし」でもスズメたちを怖がらせることはできないようだ。というわけで「目玉風船」にそれ程の効果があるとは思っていなかった。そして今回この「目玉かかしの秘密」を目にして思った。「そういえば一時のように『目玉風船』を見ることがなくなった。あれは一体どうなったのだろうか。」これが、私がこの本を読むことにした理由である。

「目玉かかし」がカイコの研究から生まれたものとは思ってもよらなかったし、著者の作った「目玉かかし」にはちゃんとした裏付けがあったということを知った。また黒いゴミ袋にも防鳥効

果があるというのには驚いた。畑に黒いゴミ袋がぶら下がっているのを見たことはあった。家族と話さうちに「カラスに似ているのだろう。」という結論に達したがやはりそうだったのだ。となると、カラスに効果があるのは都会では見られなくなったタカ・ワシ等の猛きん類をモデルにした「カカシ」だろうか。確かに農家にとって農作物を荒らされるのは大変な打撃に違いない。私の家でも米を作っているが、収穫するまで大変な労力を要する。ただ商品としての作物を収穫するというだけでなく、大事に育ててきた作物を無事に収穫できるという喜びを伴うものだ。だからそれをふいにされる悔しさはよく理解できる。だからといって果樹園を荒らす鳥を害鳥として駆除してよいものだろうか。

現在たくさんの動物が絶滅寸前であると言われているが、これらの動物は数十年前ではごく当たり前に見ることができた普通の動物だったはずだ。絶滅寸前になってあわてても手遅れなことはトキやカワウソの例でよく解っているはずだ。ゼロになってしまったら元に戻すことはできない。

私は思う。人間は、同じ地球上に住む生き物として、自分達の利益の為に他の動物を排除することは許されていないはずだと。人間のエゴのためにあちこちで生態系が少しずつ崩れているし、そのことが動物の害を増やす要因になっているのではないだろうか。「目玉かかし」は決して鳥たちを退治するための道具として生まれたのではなく、私たち人間が鳥たちに危害を加えることなくうまく共存するために生まれた物だったのだろう。そして、これこそが目玉かかしの「秘密」なのではないかと思った。

乙武洋匡 著

「五体不満足」を読んで

電子制御工学科1年 上谷 巧

正直、本屋で初めてこの本を見た時僕は驚いた。

手も足もない人がいるなんてちょっと信じられなかった。そう言うわけで前々から興味があった本なので、今回読書感想文を書くに当たってこの本を読んでみようと思った。

初め僕は、こんなに重度の障害を持っているのなら、友達からいじめられたり差別されたりしてつらい目に遭ってきたんだろうなと思っていた。しかしこれは大間違いだった。この本の著者、乙武さんは友達にいじめられたことなど一度もない。それどころか、みんなのリーダー的存在であり、しかも二十歳頃になるまでは自分は障害者だという自覚さえなかったと言うから驚きだ。

要するにその人自身の問題だと思う。健常者でも暗くふさぎ込んでしまう人もいれば、乙武さんのように明るくやっぴいける人もいる。「目が悪い」とか「足が遅い」というのも、言ってみればその人にとって障害だ。でも、誰もその人たちを障害者だとは思わないだろう。元々、「障害者」なんて言葉はなかったはずだ。人間が勝手に「ここからは障害者」と線を引いてしまったから差別なんかがあるんだと思う。この本に出てくる言葉を使えば「目が悪い」のも「手足がない」のも一つの身体的特徴なのだ。だから、それをとやかく言うのはおかしいし、言う必要もないと思う。

しかし、もし自分が同じ状況に置かれたら果たして僕は乙武さんのような考え方ができるだろうか。たぶん無理だろう。やっぴい僕の中には「自分がもしこんな風だったら…」という気持ちがある。乙武さんは、「障害は不便です。でも不幸ではありません」といっている。僕が同じ立場に置かれたらこうは思えない。たぶん、「何で自分だけ」とか思うだろう。そう考えると、やはり、乙武さんはすごく強いと思う。もちろん、乙武さんを支えた両親、友達、先生、そしてその他多くの人たちも忘れてはならない。

強いと言えば、乙武さんは何にでも挑戦する。野球、鉄棒、水泳と何でもやる。この部分を読んで思ったのだが、体が不自由だから何でもやってあげるとするのは本当の優しさじゃないんだなと思った。つまり、障害者にだって出来る事がた

くさんある。もっと言えば、その人しかできないことだってあるはずだ。そういう所を見つけて、時には助けてあげる事こそ、本当の優しさだと思った。

この本を読んで一番すごいなと思ったのは、乙武さんの両親だ。乙武さんの入学許可をもらうため教育委員会へ行ったり、やっぴい許可が下りてもお母さんがずっと付き添いだったりと本当に大変だったと思う。よっぴい強い親子の絆がなければ無理だと思う。やっぴい親が子を思う気持ちは計り知れないものだった。乙武さんもいい両親、友達、そして先生に恵まれて幸せであるに違いない。

障害は不便だ。でも、それは社会の環境が整っていないことにも問題がある。外国には、車椅子用のトイレ、スロープ、エレベーター等が当り前の様に完備されている国もある。だが日本はどうであろう。残念ながらまだまだである。これを変えていく事は僕達の使命だと思う。この日本を、全ての人が不自由なく暮らせる住み良い国にしていきたいと思う。

「感動は求めません。参考にしてほしいのです。」この本に書かれている言葉だ。乙武さんはなぜこのような言葉を書いたのだろうか。うまくは言えないが、「こんなに大変な人ががんばっているんだ」と思われるより、「そうか、障害者も健常者も一緒なんだ」と思ってほしかったからじゃないかなと僕は思う。僕自身はこの本に出会ってすごく勉強になったし、感動もした。この本から学び取った事をこれからも大切にしていきたい。

武者小路実篤 著

「友情」って

情報工学科1年 青山瑠美

「友情」って、とても心地よいものだと思うけれど、同時に、とても奇妙なものであると思う。

「友情」は、安くない。何処の誰とでも生まれるものではないし、生まれたら生まれたで、背負わなければならないリスクは結構ある。実際、この作品中の二人なんかがそうだ。二人は信じ合い、

頼り合い、高め合い、私が思う理想的な関係を保っていた。二人は一緒に居る時、共に心地よかっただろう。それが時として奇妙な関係に陥ってしまったのは、この場合、共に愛する女の出現だ。(「友情」という関係の裏側を「奇妙」というのは語弊があるかも知れないと思うのだが、他に適当な言葉が見つからない。)

私にも、今までに何人か(多くはない)親友と呼びたい友人ができたが、まだこの二人のような事態になったことはない。というのも、どうやら、私が仲良くなるのは性質のあまり似ない、むしろ反対の性質をもった女子であるらしいからだ。とはいえ、これからいつ何時この二人のようになるか知れない。そうしてもし、同じ人を好きになったりしたらどうだろう?

まず、私が野島の立場だったら。友に打ちあけ、相談する。相手の気も知らずに讚美する。すると、友は力になってくれると言う。何とも予想通りの展開である。ここまでは、でも、肝心の彼が振り向いてくれない。するとどうだろう。彼は友を恋し、又友も彼を恋している。そしてそれを何らかのかたちで告白される。野島ならここで、泣きながらもやはり自分を力強くして見せる。しかし、私は正直に、それは無理だ。泣くなら泣く迄だ。そして友を憎むのであろう。ここら辺りが、私が女であるという証拠で、同性に対する競争心がわいてしまっている。何にも友に宣言することもできまい。

次に、大宮的立場だったら。友に相談され、心を何かしら傷めつつ笑って協力を申し出してしまう。その彼に恋するまいと必死に抑圧する。しかし、彼は自分を好いてくれているらしい。その時点できっと私は勝ち誇ってしまうに違いない。そう思うと、この後はきっと相当などろ沼が待ち受けていることだろう。ここ迄の状況に持込む度胸もないが、いつも他人の為に気持ちを擦り減らしているであろう私が、ここで平気に立ってられる筈もなかろうと思う。

ここまで書いて、私は自分を何と人間臭くて小さい生物かと思う。しかしこれは自分を卑下して

いる訳でなく、自分を詳細に分析して見て出た結果である。多少極端な脚色は施したかも知れないが、そうも変化のあるものではない。

作品中の彼等も、裏切りを犯し、最後には「友情より愛情」みたいな風だったが、これは人間として正直に生きれば難しい人間関係の中で普通に起きる現象だと思う。ただ、私が各々の立場に立った場合と違うのは、決して二人の友情が壊れた訳にはならなかったという所だ。それはきっと、二人は互いに謙虚で礼儀があり、人格を認め合っていたからだと思う。想像上とはいえ私がこんなにも冷酷なのは、私にその気持が少ないからだと思う。全く皆無と思いたくはない。しかし旺盛でないのは確かだ。

それでも、傷つくものは傷つくし、淋しいものは淋しい。その人にとって罪と定義されるものがあれば、それも消えることはない。その困難の下に力強く根づく友情を、私はまぶしく思う。人は独りで居ては何にも考えられないし、第一に生きられない。何が何でもそうになっているらしい。それは愛する者ひとつでは満足しない。私とその友情を手に入れんとするならば、前記した心が必要だ。相手を敬い、いたわる心が。不可能ではないと思う。だから、私はもっと高く、高くに手を伸ばそう。大切なものを失わない為に。

マーク・トゥェイン 著

「不思議な少年」を読んで

情報工学科1年 畑内優子

私が、最初にこの本を読もうと思ったのは、その題名タイトルからでした。どんな不思議な少年が登場してくれるのか、とても気になったからでした。

その少年の名は、「サタン」と言いました。彼は主人公である、「テオドール・フィッシャー」とその親友二人に色々な話(アダムやイブが創造された時の話等々)をし、不可思議な現象(魔法)を次々と披露していったのです。

そう。なんと彼は——、サタンは天使だったのです!

皆さんの心の内なかにいる天使達は美しく、優しく、

我々人間を幸福へと導いてくれると思います。

しかし、サタン（本家本元である悪魔の王サタンの甥）は、違います。違いました。彼は美少年でしたが、人間とは彼にとって、とるに足りない（人間にとっての^ア^リ^以^下の）存在だと言い、「人間は^良^心（善悪を区別する能力）なんてものが在る為に、あらゆる生き物の、下劣も下劣、最下等にまで墮落しきっている。」と平然と言い切ってしまうのです。

この物語の世界は十六世紀末のオーストリアの田舎で、何事もキリスト教が支配しているのですが、サタンは主人公達に向かってこんな事も言いました。「天使は罪を犯すことなんて出来ないんだよ。だって、悪とはなにか、それが第一わからないんだからね。」と。

彼のように良心がない為に（彼だけではないが）、何をしようとも悪では無いという考え方は、人間（良心のある者）から見れば、恐ろしい事です。しかしながら、人間に良心がある限りは、必ず、悪意があるのです。「良心のない獣は他を傷つける事はあっても、わざと傷つけたりはしない。だから、それは悪ではないんだよ。人間のようにわざと傷つけたりしない限りね。」という事らしいのですが……。

それと、この物語の途中で主人公の親友の一人「ニコラウス・バウマン」は、サタンにほんの些細な行動（その日、窓を開けて寝るか、閉めて寝るか）を変更されてしまった為に、十二日後に川で溺死する運命になってしまったのです。それを聞いて、主人公は元の六十二歳まで生きる筈の運命に戻す様、頼みました。しかし、サタンは言いました。「天使は過去も未来も見通せるんだよ。彼は今回、助かったとしても、猩紅熱にかかって、その後の死ぬまでの四十六年間を盲目、全身不随で寝たきりで過ごし、死を望み続ける事になる筈だったのさ。」と。すると主人公は喜ぶのでした。「長い長い苦しみの生活から、ニコラウスを救ってくれて有り難う。」と。

しかし、可哀相な、子供を亡くした母親は、子供が息を引き取るまで神に祈り続けたのに、助か

らなかったと叫び、神を呪った。が、主人公達はその母親に対して、「ばかな母親…」と思いました。

一体、人間の良心というものは何なのでしょう？ 親友を殺されたとして、その後の人生が不幸続きであるならば、喜んで受け入れてしまったり、可哀相な母親を、幸運と不運をはき違え、取り違えているとして、平気で嘲弄する様な、人の良心というものは。

私は別にキリスト教徒ではないので、詳しい事はわかりませんでした。が、この物語を読むと、今まで当然の様に思っていた事が次々と、打ち壊され、後には不思議さと滑稽さが残るばかりでした。

この本を読むと、人間を人間たらしめているのは何なのか。良心というものは一体、何なのか。必要なものなのか、不要なものなのか。根底から考えさせられます。

灰谷健次郎 著

「島物語」を読んで

機械工学科2年 黒田健介

この話は、都会に住む父親が、田舎で生活したいという理由から一家で島へ引っ越すところから始まる。引っ越しに反対する小学生のタカユキとその姉を説得して、どうにか島へやってくる。都会に慣れた一家にとって、島での生活は予想以上に大変だった。その生活を通じて、二人の子供は「いのち」について学んでいく。

島での生活は自給自足である。畑を耕し、いろいろな野菜の種をまく。その中のニンジンの種に、タカユキは興味を持つ。ニンジンの種は、まるで糸くずの様なものだったのだ。こんなものに、本当にニンジンができるのかとタカユキは不思議がる。また、ニワトリとアイガモも育てる。ニワトリの卵は十二個で、全てがヒヨコにかえったが、そのうち一ぴきはすぐに死んでしまう。アイガモは、七個の卵のうち、無事にかえったのは三ぴきだけだった。アイガモは、アヒルとカモを合わせて人間が作り出したものなので、どうしても弱いらしい。生きものを飼うのは楽しいと思って

いたタカユキは衝撃を受ける。しかも、ペットとして飼っているわけではないので、いつかは殺して食料にしなければならない。タカユキは、人間はたくさんのいのちをもらって生きていることに気づく。

話の中では、都会の不自然さについても描かれている。野菜についた害虫を退治するために、普通は農薬をまく。しかし、父親が農薬や化学肥料を使わない主義なので、虫をハシでつまんで、油の中に落として殺すという方法を用いる。タカユキは、虫退治をする両親、姉、自分は虫にうらまれるはずだと思うが、それは不公平だと気づく。人間はみんな虫にうらまれないといけないはずなのに、都会のスーパーで野菜を買う人は、そんなことは考えないからだ。またある時、タカユキとその友人は、都会の駅で変なオッサンと出会う。オッサンは、ごちそうを食わしてやると言って、フランス料理をタッパーに入れて持って来る。結局食べないのだが、後でそれが残飯だったことを知る。タカユキは変な気持ちになってしまう。

食べ物はみんないのちだということを、この話では強く主張している。しかし実際には、スーパーで売っている食べ物を、これはいのちだと思って買う人は少ないだろう。都会では、食べ物をみんなお金で買い、高価なものを平気で食べ残す。場合によっては、捨てられた物を食べる人もいる。すごく不自然である。話の中に、「人間は死んだらみんな地獄行き」「死んで一番先に神様に叱られる動物が人間」という言葉が出てくるが、その通りかもしれない。

この話は、食べ物という身近なものを取り上げているので、説得力があった。単に「命は大切」ということを延々と書いているだけなら、「そんなことは充分解っている」というような感想しか持たなかつただろう。今まで食べ物に対して特に考えたことがなかつただけに、すごく不思議な感じがした。たかが食べ物でも、ちょっと視点を変えるだけで、ずいぶんイメージが変わることに気づいた。人間は一生の間に、何百万、何千万ものいのちを犠牲にして生きていることになる。自分

も、もう少しきっちり生きないといけないと思った。でないと、多くのいのちに悪いような気がする。そして、それだけ多くのいのちを生み出してくれる自然を、人間はもう少し大事にしないといけないと思う。

乙武洋匡 著

「五体不満足」を読んで

機械工学科2年 森口 幸

私がこの本を読もうと決めた理由は2つあった。1つは学校側の参考図書として紹介されていたということ。もう1つは、私の将来の夢が義手や義足等の、補装具を作る仕事に就きたいということだった。なぜそれが理由のうちの1つに入っているのかというと、本の表紙を見れば一目でわかるが、この本の著者である乙武洋匡さんは電動車椅子に乗っている。将来、私が関わりを持ちたいと思っている人たちの内の1人であることは間違いなかった。

私はさっそく読み始めたが、この本に書かれていることは、私が想像していたものとは異なっていた。てっきり、障害者である乙武さんが、周囲からの偏見や差別等をどう乗り越えてきたかを書いたものだと思っていたら、全くの逆だった。いかに周囲の人たちが、重度障害者である乙武さんを、暖かく受け入れてくれたかを書いたものだった。乙武さんは、自分が障害者であると自覚したのが大学に入ってからだったそうだ。私は本当にそんなことがありえるのかと驚いた。彼自身「『自分には手足があり、健常者とまったく同じだ』などと思い込んでいたわけではない」と述べているが、いくらなんでも…。と考えさせられた。しかし、よく考えてみればそれも別に不思議なことではないように思えてきた。人それぞれ身長差があれば体重差もあり、自分とまったく同じ人間なんていくら探しても見つかるわけがない。そんな中で、乙武さんは手と足がない人間として生まれてきた。ただそれだけの違いだ。その「違い」を個人の特徴としてとるか、障害と呼ぶかの区別だけで、乙武さんが、自分は障害者だ。と自覚しな

ければならないわけでもなければ、自覚せずに生活してきたことがおかしなことなんかではない。生活していく上で、本来なら手足がないという点で障害と感^じられる場面がいくつか出てくるだろう。しかしその度に、両親や友達があたりまえのこととして、手助けをしてくれるのなら、それを「障害」と感じる方が難しい。

乙武さんは、障害者が多くの手助けを必要とすることを認める一方、障害者をそのような立場に追い込んでいるのは「環境」だと述べている。「環境さえ整っていれば、ボクのような体の不自由な障害者は、障害者でなくなる」という彼の言葉は、私の考え方を180度ひっくり返した。前に述べているように、補装具を作る仕事に就くことが私の夢だ。体の不自由な人、その人たちそれぞれが、社会環境の中で健常者と同じような生活を送ることができるものを、お年寄りの方でも操作の簡単なものを、できるだけコストのかからないものを、などいろいろ考えていたのだが、根本を考え直させられた。一般に補装具とは、一個人に適用するように作られた物のことを指す。よりよいものを目指すと、大量生産なんて以ての外だ。補装具そのものを否定する気はないし、将来それを作っていこうという意志が変わったわけではないが、障害者にとって第一に必要なものは補装具ではなく、障害者でも障害と感^じることなく生活してゆける社会環境なんだと感^じた。優れた補装具を作ることで、障害者の生活のすべてを保障できる気でいた自分は未熟だった。障害者の人たちはかわいそうだ。という固定観念のようなものに取りつかれていた私は、補装具を作る仕事に就こうとしている自分をヒーローのように感^じ、自分自身に酔っていた部分があった。しかし、本の最後にある「障害は不便である。しかし、不幸ではない」というヘレン・ケラーの言葉を見て、健常者が障害者に対し可哀相と感^じることは非常に失礼なことであり、何かをしてあげるとい^う気持ちを持つことは単なるおせっかい野郎で終わってしまうのだと気付いた。

ウォルター・ディーン・マイヤーズ 著

「自由をわれらに」を読んで

電気工学科2年 玉井芳英

時代がどんなに変わろうとも、人間というものは己れの欲の為に平気で他人を侵害するものなのだろうか――。

僕はこの本が、単に海の向こうの黒人奴隷の問題に止まらず、あらゆる国の人々が、ある時は同じ国の者同志で、またある時は他国の人々に対して侵してきた戦争という名の人権問題に矢を投じているように思えてならない。

彼の名は、センベ・ピエ。年齢は二十代半ば、若くて健康なアフリカ人である。田んぼへ行く途中、奴隷狩りにあい抵抗空しく捕らえられたのだ。センベの代金は、スペイン産のブランデー一本の値段よりも安かったという。当時、奴隷貿易はほとんど世界中で禁止されていた。特にイギリスの船はアフリカの沿岸をみまわって、奴隷が密輸されないよう監視していた。それにもかかわらず、彼は捕らえられたのだ。しかも、大小便の悪臭が立ちこめる甲板の下に、隣の人に触れずには体の向きがかえられないくらいぎっしりと詰めこまれ、遥か遠くへ運ばれたのだ。水は一日コップ一杯だけ、逆らえば容赦なく鞭がとんでくる。今まで何の変哲もなく平凡に暮らしてきた彼にとって、これは悪夢としか思えなかったであろう。そんな航海の途中、センベと大勢の黒人達は、自由を得るために立ち上がった。手足に掛けられた枷はずし、猛然と彼らの敵に襲いかかった。そして、アミスタッド号は、彼らの手に落ちたのだ。

1839年8月、黒人奴隷をのせたアミスタッド号が、ニューヨーク州ロングアイランド島沖に停泊した。そして、これこそが黒人奴隷達が夢にまでみた自由への始まりだった。

アミスタッド号事件を巡って、人々の間でいろいろな意見が出された。その中で特に僕の心を引きつけて離さなかったことは、正義感の強い数人の人々が、アフリカ人の人間としての権利を守るために立ち上がってくれたことだ。当時の社会状況から考えて、それは何と勇気のいることだろう。

僕は彼らの正義感に、ひたすら頭の下がる思いである。そして、ワシントンの大法廷でようやく、ピリオドがうたれた。センベが捕らえられてから3年の歳月が流れていた。

自由とは何か。それを語るには、僕はあまりにも幼く、あまりにも幸福すぎる。ただ、憲法で定めるところの自由を引用すれば、

『自由とは、すべての人間が生まれながらにして持っている権利であり、何人もこれを侵してはならない』

しかし、現実にもその自由を奪い取られている人々が、何と大勢いることだろう。戦争という状況の中で強制連行され、働くだけ働かされたあげく、現在に至っている在日韓国人達は、出発点こそ違っているけれども、まさにアメリカの黒人達に匹敵するのではないだろうか。

この本は、黒人奴隷の問題を通して、遠い昔から国の東西を問わず、なされ続けてきたいろいろな差別への人間の叫びだと僕は思った。1840年1月、法廷で証言した後、センベ・ピエは叫んだ。

「おれたちを自由にしてくれ。」

この叫びに心を動かされなかった者が、果たして何人いたろう。本を通して知った僕でさえ、胸の高鳴りを押さえ切れなかったくらいだ。センベ・ピエのこの叫びは、当時の人々の心を捕らえて離さなかったことだろう。そして、僕はこの叫びの中に、虐げられてきたあらゆる国の人々の声を聞いたように思った。

現代も続いているアメリカの黒人差別。そして、日本の同和問題など、もうそろそろ人類は己れの欲望だけに溺れず、他人と共存して栄えるよう実践すべきではないだろうか。二十一世紀は、近いのだから――。

辺見庸 著

「もの食う人々」を読んで

情報工学科2年 西野達也

それは何日か前の事だった。その時の夕飯はご飯とマーボー豆ふとあと何か一品だった。そのマーボー豆ふには微量ながらも僕の超不得手な“玉ネ

ギ”が入っていたのでそれをひたすら皿によけながら食べていた。母の顔を見ずとも母のあきれ顔が目に見え、母にあきれられなくともそんな自分には僕自身あきれている。しかし、どうしようもないのだ。そして、ごちそうさまを言った時、母にゴハンのおわんに大量にこびりついた米つぶについての指摘があった。気がつかなかった。僕ははいそいでそれを食べると2度目の正直とばかりにごちそうさまを言って、食後の皿を流し台の上においた。皿によけた玉ネギと共に…。この時この当たり前のように過ごして来た日常に異変をもたらす事になる書物に、その時は後書きだけ読んでなんとか感想文を書こうとしていた、「もの食う人々」という本の本編に出会う事は知るよしもなかったのである。

その出会いは突然だった。電車の中でその本のあと書きを読み終わったら、思ったより時間が余ったので本編を読んでみると、食べ物こそまつにした時によく言われた「世界には貧しい人がたくさんいて、あなたの残した分だけでも争って食べる人がいるんだから、その人の事を思ったら残さず食べるべきだ。」という何度か聞いた“貧しい国”の生活が書かれていたのだ。その人達はいろいろな意味でどうしようもない状況に置かれているのである。パーティなどの残飯の方がいいものなのでお金を出して買う人々や、極度のインフレで放射能に汚染された物でも食べざるを得ない人々。自分たちの給料より高いネコの生エサを作っている人々…。彼らのどうしようもない状況は様々だ。だけど彼らは生きているし、その生活が当たり前なのだ。それを見て、貧しい国に寄付をしようというのも悪くない考えだし、すべきだが。それよりも目を向けるべき事はあるのではないだろうか。この日本に生まれた人の多くは食べ物に不自由する事はほとんどない。事実、僕も例外ではない。そんな生活の中で忘れてしまったのではないだろうか。食べ物大切さを当たり前であり当然でもある事なのだが、それだけに常識という表面上の言葉で理解したつもりでいるが、本当の事には気が付かなかったのだ。もし、本当に気が付いてい

たら玉ネギを捨てたり茶わんに残っているごはんに気がつかない訳がない。この本は、耳にタコができるほど聞いて理解していたつもりでいた真実を僕に教えてくれたのだ。

この本を読んでからすぶたとごはんとフライといった夕飯に出会った。茶わんは米つぶひとつぶ残らず食べ尽くした。フライは言うまでもなくたいらげた。そして肉をなくしたすぶたの皿の上には玉ねぎが何切れか残っていた。勇気をふりしぼって一切れを口に入れた。まずい。なんとか三切れは食べたが残り二切れは母に気づかれないように母の皿に混入した。まあ、多分気づいているだろうが…。思い立ったその日からつまずいている自分がいやになったが、この本との出会いが普段はほとんど考えなかった事を考えさせてくれた。それだけでも大きな進んでんだと思った。

ロバート・ニュ 著

「豚の死なない日」を読んで

物質化学工学科2年 木田智佳

この本で最も印象的だったのは、現代の私たちと全く違う環境で成長していく少年の姿でした。

この少年ロバートの一家は大変貧しく、その上服の飾りのフリルのような、なくてもすむものを排除した質素な生活を心がけていました。フリルがないと、あれがほしい、これがないと悩むことがないという言葉に、私は何か超越したものを感じました。現代では、物は確かに便利さや快適さの追求の結果豊かになってきたかもしれないけれど、自分たち自身は、豊かになるどころかむしろ空洞化してきているようにさえ感じられます。こんなことを考えていると、フリルのない生活を豊かだと子供ロバートに言い切れる父親はすごいと思います。

この父親にロバートは一人の男として育てられ、自分たちが生きていく上で仕事の手伝いをするのは当然のこととされていました。私は家のちょっとした手伝いでさえも文句を言いながらするありさまなのに、ロバートはいやな顔をすることでか、様々なできごとや動物たちを通していろんなこと

を吸収しているようでした。

こんなロバートに、出産を手伝った牛の主人から豚がプレゼントされ、ロバートはこの豚をピンキーと名付けて、兄妹か友達のように生活しました。でも、こんな幸せもつかの間で、ロバートは父親がもうすぐ死ぬと告げられます。これからは自分しか頼れない状況になったロバートはどんなにつらく心細かっただろうと思います。また父親も、きっと不安だらけだったと思います。でも子供にはそういうところを一つも見せず、ロバートを信頼してすべてを話したことは、普通はできないことだと思います。

こんな強いショックをうけたロバートに追いつけるように、ピンキーを殺さなくてはならない状況になってしまいます。ピンキーは不妊症で、そしてピンキーに与える余分なエサはもはや一家にはなかったのです。あんなにかわいがっていた豚を殺すのはどんな思いだったろうと思います。まず私には耐えられません。でもロバートは、どんなに辛くてもピンキーを最後まで見とどけました。私は、生きていくことはこんなに厳しいものなのかと思いました。ピンキーはロバートの兄妹や友達の領域をこえて、ロバートが一人前の大人になるためにのりこえなければならぬ試練となって死んでいったんだなあと思いました。これからどんな困難にも立ち向かっていけるように、ロバートを成長させてくれて、またその姿は、父親を安心させたと思います。

この試練をのりこえて一回り成長したロバートは、父親が死んだ日、落ち着いた対応をします。短い間に大切な二人の家族を失ったロバートの強さを感じました。生きるということは、楽しいことよりも辛いことの方がずっと多いと思います。それでもその辛いことにうち勝って生きようとするロバートは、きっと本当の豊かさを自分の力で見つけだしていけるんだと思います。私は、この先もしもくじけそうになる時があったら、ロバートのように強く生きていきたいと思います。また、本当の豊かさがわかる人間になりたいです。

図書館大会に参加して

図書係 福井 洋子

図書館大会は民主主義にもとづく文化国家の基盤となる図書館の構築をめざすという理念のもと、公共図書館、大学・高専、学校、専門などあらゆる図書館と図書館に関わる人たちが一堂に会する図書館の年中最大の行事です。今年で85回目を迎えるという歴史ある大会です。大会の決議事項や討議内容が図書館の運営や出版界に及ぼす影響は非常に大きいものです。

その全国図書館大会が10月27日から29日にかけて、滋賀県大津市のびわこホールを主会場にして開催されました。今回は図書館発展の牽引的役割を果たしている滋賀県が開催地ということで、1900人もの図書館人が全国各地からこの湖国・滋賀に集いました。

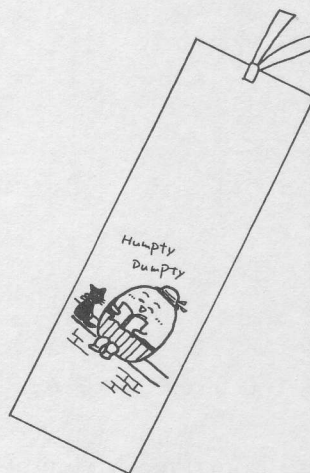
滋賀県に高専がないことから奈良高専図書館が近畿地区を代表して当番校として高専分散会のお世話をすることになりました。今回の分科会テーマ「誰でも利用したくなる図書館をめざして」に沿って、事前に全国高専図書館にアンケート調査等を行なったこともあり、会場準備、アンケート集計等開催直前まで多忙な毎日で、学生の皆さんにもご迷惑をおかけしたことと思います。

2日目の短大・高専分科会では本校福岡校長による「高専図書館のあり方について」と題した基調講演が行われました。午後からの高専分散会では、高専図書館の組織化とその運営について活発な討議がなされました。続いて第二部のパネル・ディスカッションでは「誰でも利用したくなる図書館をめざして」の各高専図書館での取り組みのアンケート結果を本校杉本図書係長が発表、引き続きパネラーによる自館の事例報告、利用者としての希望、高専図書館とは切り離せない長岡・豊橋両技大図書館から示唆に富んだ貴重な提言等がありました。

マイクを持って走り回っていた私ですが、ただ一人、利用者の立場からパネラーとして参加下さった本校卒業生で、現在奈良先端科学技術大学院生上田悦子さんの①頼りがいのある図書館職員たれ②技術革新や、新しいニーズに敏感であれ③テクノクラートのリーダーたれという発言に、高専図書館で働く図書館職員として叱咤激励されたというより、日頃の怠慢を指摘されたようなショックを受けました。緊張し通しの三日間ではありましたが、大きな刺激を受け、初心に還ることの大切さを再認識させてくれた有意義な大会参加でした。

過去最高の88名の参加者数を数え、意義ある高専分散会としての評価を得ることができましたことはご多忙中にも拘わらず「基調講演」をして下さった校長先生をはじめ、金窪部長、小柳津庶務課長、中裏さん、西出さんの存在を抜きにしては考えられません。

この場をお借りしてお礼申し上げます。



第13回ブックハンティングを実施

電子制御工学科3年 村田 祐一



皆さん、図書委員会の仕事を知っていますか。

図書館のカウンターのお手伝いや本の整理等が主な仕事ですが、他に、大きなイベントとしてブックハンティングというものがあります。

ブックハンティングとは毎年2回恒例で行っているもので、近鉄駅前の啓林堂書店さんのご協力で、図書委員が書店へ直接出向き好きな本を図書館に買ってもらえるという、お祭りのようなイベントなのです。

去年末のブックハンティングでも、予算の十万円の中でたくさんの本が購入されました。皆、図書委員が自分だけでなく周りの人みんなに読んでもらいたいと思って選んだ本ばかりで、私自身も普段は見向きもしなかったあっと驚くような本がたくさん購入されたと思っています。

今、これらの本は図書館のカウンターの向かいの棚に並べられています。普段は図書館に行かない人でも、一度図書館に行ってみてはどうでしょうか。何か面白い本が見つかるかもしれません。

また、図書委員会では皆さんに本を好きになってもらうためのイベントも考えています。本に興味のある方、自分の好きな本を他の人にも読んでもらいたいと思っている方、来年は、図書委員会に入ってみてはいかがでしょうか。

ブックハンティング購入リスト

書名	著者名
• ゆずのうた本 ゆずえん	北川悠仁
• 黒い家	貴志祐介
• ひまわりの森	トリイ・ヘイデン
• シュリ ソウル潜入爆破指令	鄭 石華
• スパイ失業	赤川次郎
• ゾマホンのほん	ゾマホン・ルフィン
• アイ・ラヴ・ユー	岡崎由紀子
• レインボー・シックス1	トム・克蘭シー
• レインボー・シックス2	トム・克蘭シー
• 幽霊暗殺者	赤川次郎
• 顔(上) 1版	シェルダン著 天馬龍行訳
• 顔(下) 1版	シェルダン著 天馬龍行訳
• ボーダーライン	真保裕一
• ゴジラとは何か	ピーター・ミュソッフ
• 小説 ゴジラ2000 〈ミレニアム〉	柏原寛司
• ホワイトアウト	真保裕一
• ランゴリアーズ Four Past Midnight 1	ステイヴン・キング

書 名

- ・くるぐる使い
- ・グミ・チョコレート・パイン グミ編
- ・新 ゴーマニズム宣言7 1版
- ・ギター人間⑤
- ・ギター弾き語り 福山雅治ベスト曲集
- ・テクニックを磨け! J-Hits Artists (秘)ハーモニカギター・プレイ
- ・千畝(ちうね) 一万人の命を救った外交官 杉原千畝の謎
- ・そして謎は残った 伝説の登山家マロリー発見記
- ・シリコンバレー戦国史 @誰が覇者となるのか
- ・「便利」の仕組みがよくわかる 大人の科学常識 知って驚く意外な大疑問!
- ・間違いだらけのクルマ選び2000年版 全車種徹底批評
- ・マラソン でたらめ理論
- ・相性まるわकारいの動物占い
- ・新興宗教オモイデ教
- ・正しい留学の手引き 2001年度版
- ・高校別入試対策シリーズ605 奈良工業高等専門学校 平成12年度受験用
- ・New・山口英文法講義の実況中継(上)
- ・New・山口英文法講義の実況中継(下)
- ・New・山口英文法講義の実況中継 問題演習
- ・実戦システム 新 総合英語
- ・英文法詳解 A Comprehensive English Grammar
- ・チャート式 解法と演習 数学Ⅲ+C
- ・教科書が教えない歴史2 1版
- ・教科書が教えない歴史3 1版
- ・新課程用 体系新 物理IB・II
- ・新課程 物理IB・II 標準問題の解き方 物理完全理解の146題
- ・ウイナー 化学IB・II [総合版] 大学入試への総合力完成
- ・よく出るよく分かる 第2種 [午前]問題集 新カリキュラム対応
- ・第2種 情報処理[午前]問題と解説 新カリキュラム対応
- ・第2種 情報処理[午後]問題と解説 新カリキュラム対応
- ・Visual Basic 言語リファレンス
- ・すぐわかる Perl
- ・Perlで作るCGI入門 応用 生きたホームページを作るために
- ・DelphiによるCOM徹底活用 シェルプログラミング入門 Delphiの神託(CD-R)
- ・Emacs Lisp プログラミング入門
- ・Flashムービーのアイデア箱 SCCライブラリーズ編 Ver.4対応(CD-ROM付)
- ・殺戮のための超・絶・技・巧 パーミリオンのネコ1
- ・中田英寿「超」ULTRA事典
- ・合気道教範
- ・極真空手 甦る最強伝説
- ・少林寺拳法のススメ
- ・格闘技別肉体鍛錬バイブル 最強の男たちはこうして生まれた
- ・最強の格闘技テクニック あらゆる戦いに勝利を収める 究極の必殺技
- ・秘伝!! ジークンドー護身術 ブルース・リーが生みだした格闘術
- ・スーパースターに学ぶ 格闘技 必殺技53 奇跡を生んだ男たちのオリジナルテクニク
- ・ストップ・ザ・オーバートレーニング 競技力向上のための正しいトレーニング

著 者 名

- 大槻ケンヂ
- 大槻ケンヂ
- 小林よしのり
- 尾崎 豊
- 福山雅治
- 波木克己
- ヒレル・レビン
- ヨッヘン・ヘムレブ/ラリー・A
- 井上一馬
- ハイパープレス
- 徳大寺有恒
- 小出義雄
- ビッグコミックスピリッツ編集部
- 大槻ケンヂ
- ICS国際文化教育センター監修
- 山口俊治
- 山口俊治
- 山口俊治
- 赤川 裕 (監修)
- 杉山忠一
- 荒木不二洋 (編)
- 藤岡信勝/自由主義史観研究会
- 藤岡信勝/自由主義史観研究会
- 下妻 清
- 木暮隆夫
- 稲本直樹
- 日高哲郎
- 福嶋宏訓
- 福嶋宏訓
- スティーブン・ホルツナー
- 深沢千尋
- 結城 浩
- 新井正広
- Robert L. Chassell
- 小泉 茜
- 竹本健治
- ワールド アッカ ファンズ
- 植芝吉祥丸
- 塚本佳子
- 少林寺拳法連盟 (監修)
- 小島一志 (編)
- 廣戸聡一
- 御館 透
- 小島一志 (監修)
- 新畑茂充

図書館からのお知らせ

★学年末休業中の図書館利用について

- ・開館日時 3月21日(火)～4月3日(月) 8:30～17:00まで
土曜・夜間開館はありません
- ・閉館日 4月3日(月)～4日(火) 館内整理、新年度準備のため
- ・貸出冊数 6冊まで 3月1日(水)から貸し出します。
- ・返却日 4月6日(木)までに返却

なお、卒業予定者は卒業式当日までに必ず返却してください。もし、紛失した場合は、図書館カウンターにてご相談ください。

★図書館ホームページについて

みなさんは図書館のホームページをご覧になったことがありますか。

ここでは、図書館の利用案内・新着図書情報・開館日情報・月間貸出トップ10・お知らせなど、図書館を効率よく利用するためのいろいろな情報が満載されています。希望図書も書き込めますし、本校図書館の蔵書検索もできます。また、書店や国の内外の図書館にも、リンクが張ってあります。自宅から、演習室から、もちろん図書館から、ぜひ一度お試しあれ。

● 一般開放についてのご案内 ●

本校図書館を中学生以上の方々に開放するようになってから、今年の4月で4年が経過します。その間、多くの方々にご利用いただけてきましたが、まだ一般開放をご存じない方のために、再度ご案内します。

【利用手続き】 利用者本人の確認ができるものをご持参の上、利用証の交付を受けてください。

【利用時間】 平日 9:00～20:00

土曜日 9:00～16:30

本校学生の休業期間中は平日のみの利用で17時閉館となります。

【貸出冊数】 1人3冊以内

【貸出期間】 2週間

編集後記

本年度、図書委員であり、また本年度退官される前図書館長の中和田先生に巻頭言を、同じく栗本先生に特別寄稿をお願いしました。多忙の皆様へ原稿を依頼することを、常に心苦しく思っている折り、本校卒業生の百瀬さんから「是非、掲載してほしい」との依頼があり感激いたしました。また、読書感想文コンクールで入選された学生諸君に賛美を贈るとともに感謝します。
(委員一同)